

令和 2 年 6 月 16 日現在

機関番号：41201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02532

研究課題名（和文）初期近代イングランドにおけるイスラム演劇の変遷と政治的・文化的推進力に関する研究

研究課題名（英文）A Study of the Transition of Islamic Plays and the Political and Cultural Thrusts in Early Modern England

研究代表者

石橋 敬太郎（ISHIBASHI, Keitaro）

岩手県立大学盛岡短期大学部・その他部局等・教授

研究者番号：80212918

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、初期近代イングランドにおける外交政策、地中海貿易や宗教的対立といった新たな切り口によってイスラム教国モロッコ、トルコやペルシャを再認識しようとする歴史実証主義に基づく方法論によって、イスラム世界を題材とした演劇作品を歴史事象的に検証した。研究の結果、執筆・上演された時期のイングランドのバーバリー地域に対する政治的、経済的そして宗教的な文脈がイスラム世界を描いた演劇作品の主題を形成していたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

イングランドないしヨーロッパの政治的、経済的及び宗教的な文脈から初期近代イングランドの演劇作品をとらえる従来の研究にイスラム世界の視点を加えることができ、より重層的な演劇理解を可能にした。また、北アフリカ、中近東及びヨーロッパ諸国間のパワーバランスが初期近代の底流をなしていたことを明らかにしたことにより、これらの地域に対する国際理解の一助となりえたと思う。

研究成果の概要（英文）：Through the subject of a historical positivist methodology that aims to re-recognize the Islamic nations of Morocco, Turkey and Persia by new approaches such as foreign policy, Mediterranean trade and religious conflict in early modern England, we verified plays depicting the Islamic world historically. The result is that the political, economic and religious context of England for Barbary formed the subject of the plays.

研究分野：初期近代イギリス演劇研究

キーワード：イスラム 初期近代 外交政策 地中海貿易 宗教 演劇

1. 研究開始当初の背景

近年、初期近代イングランドで執筆・上演されたモロッコ、トルコやペルシャなどイスラム世界を題材とした演劇作品(以下、イスラム演劇と表記する)分析が顕著になり始めた。注目すべきは、Nabil Matar の *Islam in Britain, 1558-1685* (1998) 及び *Turks, Moors and Englishmen in the Age of Discovery* (1999) の出版であった。彼の研究は、従来の初期近代イングランド演劇研究において見過ごされていたムーア人の人種的・政治的背景の解明に大きく貢献した。さらに、Daniel Vitkus の *Turning Turk: English Theatre and the Multicultural Mediterranean, 1570-1630* (2003) をはじめとして、Matthew Dimmock や Emily C. Bartels たちによる研究は、モロッコ、トルコやペルシャとの経済的な交流を政治と結び付けて、スペイン勢力を封じ込めようとするイングランド政府の政策を実証的に解明した。

現在、初期近代イングランドで執筆された演劇研究におけるイスラム世界に向けられた問題意識は、外交、貿易、宗教的対立といった新たな切り口によって、これまでの材源研究からイスラム教国モロッコ、トルコやペルシャを再認識しようとする歴史実証主義に基づく方法論へ推移している。ただし、Nabil Matar たちの研究がイスラム教徒の人種的解明と表象に関心を寄せるか、イスラム教に改宗を迫られるキリスト教徒の不安を指摘するにとどまる傾向にあったことは否めない。本研究は、初期近代イングランドで書かれた現存する公文書や有力な歴史的基礎資料を駆使して、この時代に執筆・上演されたイスラム世界を扱った演劇作品を歴史事象的に検証し直し、これらの作品が推進した政治的役割や文化現象を時系列的に論じようとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、初期近代イングランドで執筆・上演されたモロッコ、トルコやペルシャなどイスラム世界を題材とした演劇作品を「歴史実証主義的立場」から新たに検証することである。この時代に執筆・上演された主な演劇作品は、ジョージ・ピール作『アルカザールの戦い』(1589)、ロバート・グリーン作『トルコ皇帝セリムの悲劇』(1591)、トマス・キッド作『ソリマンとパーシダの悲劇』(1592)、トマス・デッカー作『情欲の世界』(1600)、トマス・ヘイウッド作『西の国の美女』第一部(1602)、ロバート・ダボーン作『トルコ人となったキリスト教徒』(1612)やフィリップ・マッシンジャー作『背教者』(1634)などである。

本研究の最大の特徴は、イスラム世界に対する概念を現存する公文書や有力な歴史的基礎資料を駆使した「検証可能な方法」で検証し直すことにある。これにより、イスラム世界を題材とした演劇作品を執筆された時期の政治的、経済的、宗教的あるいは文化的な文脈のなかでとらえることが可能となり、イングランドのモロッコ、トルコやペルシャとの外交政策に対する演劇作品の姿勢を再検証し、これらの演劇作品が推進した政治的役割や文化現象を時系列的に新たに解明できることになる。そして、Nabil Matar たちの研究をさらに発展させるとともに、イングランドの王権や教会権威からの解放などをめぐる従来の演劇研究に新たな知見を加えようとするものである。

3. 研究の方法

本研究の方法は、初期近代イングランドで執筆・上演されたイスラム世界を題材とした演劇作品を歴史事象的に検証し直し、これらの作品を当時の政治的、経済的及び宗教的な文脈に位置づけて、そのメッセージを時系列的に浮かび上がらせようとするものである。そのため、本研究では、1590年代、1600年前後とジェームズ一世統治期の3つの時期に分けて作品分析を行った。

(1) 1590年代のイスラム演劇

イスラム世界を題材とした演劇作品を誕生させ、成立させたのは、ジョージ・ピール、ロバート・グリーンやトマス・キッドであったと考えられている。本研究では、ジョージ・ピール作『アルカザールの戦い』(1589)、ロバート・グリーン作『トルコ皇帝セリムの悲劇』(1591)及びトマス・キッド作『ソリマンとパーシダの悲劇』(1592)を取り上げ、イングランドのモロッコやトルコとの外交史、現存する公文書やパンフレットを駆使して、初期近代イングランドでイスラム世界を題材とした演劇作品が誕生し、成立した基盤の分析を実施した。

(2) 1600年前後のイスラム演劇

1600年に入ると、トマス・デッカー作『情欲の世界』(1600)、トマス・ヘイウッド作『西の国の美女』第一部(1602)などの演劇作品が執筆・上演された。デッカーは、『情欲の世界』において史実を曲げて、スペイン王位を狙うフェズの王子エリエザーの政治的野心と、スペインからの追放を描く。ときを同じくして、ヘイウッドは、『西の国の美女』第一部においてキリスト教徒ベスに追従的なモロッコの支配者を描く。本劇をイングランドとモロッコとの外交史に位置づけて、分析を試みた。

(3) ジェームズ一世統治期のイスラム演劇

ジェームズ一世が推進した海上貿易の拡大を背景として、トルコの貿易都市テュニスを舞台としたロバート・ダボーン作『トルコ人となったキリスト教徒』(1612)やフィリップ・マッシンジャー作『背教者』(1634)が執筆・上演された。これらの作品に共通するのは、改宗の主題であ

る。本研究においては、カトリックとプロテスタント諸派の統一によるヨーロッパの再構築を望むジェームズ一世の宗教政策と当時の宗教関連書を駆使して、改宗を主題とするこれらの作品の分析を試みた。

4. 研究成果

本研究では、初期近代イングランドにおける外交政策、地中海貿易や宗教的対立といった新たな切り口によってイスラム教国モロッコ、トルコやペルシャを再認識しようとする歴史実証主義に基づく方法論によって、イスラム世界を題材とした演劇作品を歴史事象的に検証し直した。研究の結果、執筆・上演された時期のイングランドのバーバリー地域に対する政治的、経済的そして宗教的な文脈がイスラム演劇の主題を形成していたことを明らかにした。主なイスラム演劇作品の研究成果は次のとおりである。

(1) ジョージ・ピール作『アルカザールの戦い』(1589)

舞台には、優れた軍事的力量と政治的な洞察力をもった現存するモロッコ国王アフマド・アル・マンスールが登場し、モロッコの王位を継承する。このモロッコ国王の描かれ方は、対スペイン外交上、同国を信用に値するパートナーとみなすエリザベス政府の外交戦略を支持するものであったであろう。しかし、劇中には、将来モロッコがスペインと協力関係を結ぶことも暗示されている。このようなモロッコの政治的戦略を背景とすると、劇中にはエリザベス政府の対モロッコ外交政策に対する不安が巧妙に刷り込まれていることを明らかにした。

(2) ロバート・グリーン作『トルコ皇帝セリムの悲劇』(1591)

劇中では、1511年から翌12年にわたるトルコとペルシャとの争いを背景として、セリムが周辺諸国と同盟しながら、二人の兄コルクトとアコマットを排除し、父バヤズィト二世を退位させて、帝国拡大に至るトルコ史が再現されている。劇作家が描出するトルコ史には、1590年前後に世界支配をもくろんだトルコの勢力拡大のための戦略と、トルコを阻止するためにペルシャがヨーロッパ諸国との同盟を築き始めた新たな国際秩序が垣間見える。この新たな世界秩序のなかで、エリザベス政府は、対スペイン外交上、トルコとの軍事的な同盟を皇帝ムラト三世に求め続けた。本研究では、本劇を執筆された時期のエリザベス政府の親トルコ政策に位置づけて、劇中にその政策の曖昧さや矛盾を見出した。

(3) トマス・キッド作『ソリマンとパーシダの悲劇』(1592)

1588年のアルマダ撃滅後も続くスペインによる侵略の危機を払拭するために、エリザベス政府は、トルコをカトリックの懲罰者とみなす神学者たちの見解にも支えられて、親トルコ政策に傾斜していく。劇中には、1590年代初期の東地中海をめぐる国際情勢を思わせる出来事がいくつか描出されており、本劇を執筆当時の国際情勢に位置づけて読み込むことを可能にしている。本研究では、劇中のパーシダのトルコ皇帝ソリマンに対する挑戦が、対スペイン外交上、トルコ人の本質を見抜けないまま、親トルコ政策を推進するエリザベス政府に対する批判を暗示していたことを明らかにした。

(4) トマス・デッカー作『情欲の世界』(1600)

劇中では、スペイン王位を狙うフェズの王子エリエーザーの政治的野心と、スペインからのムーア人追放が描かれる。本研究では、本劇をイングランドにおけるムーア人追放の文脈に位置づけて、当時の公文書、歴史的基礎資料やパンフレットをもとに分析を行った。そして、エリザベス政府の親モロッコ政策に対する劇作家の不安を劇中のエリエーザーの裏切りに満ちた政治的野心と転落にたどった。

(5) ロバート・ダボーン作『トルコ人となったキリスト教徒』(1612)

本劇では、トルコの貿易都市テュニス舞台として、当地の支配者や商取引の仲介者であるユダヤ人がイスラム教への改宗によってイングランド人海賊ジョン・ウォードを取り込み、莫大な利益を上げるコミュニティが描かれる。このような商取引のコミュニティが描出された背景には、国王から独占権を与えられた東インド会社など特権会社によって排斥されたイングランド人海賊の現実と、国家から干渉されない自由貿易体制を訴えていた貿易商人の現実を映し出していたことを明らかにした。

(6) フィリップ・マッシュンジャー作『背教者』(1634)

劇中において、イエズス会士フランシスコがイスラム教に改宗した海賊グリマルディを改心させたほか、平信徒のヴェネツィア人紳士ヴィテリがトルコ王子ドヌーサをキリスト教に改宗させる場面が描かれる。このような場面がプロテスタント王国イングランドの舞台に現れた背景には、ヨーロッパにおけるトルコ勢力拡大を阻止するために、 sacramentによって人間の罪が許され、神の恩寵を受けるという教義がプロテスタントとカトリックの双方に認められると主張し、両派を統一したキリスト教国を再構築しようとするジェームズ一世の宗教政策が垣間見られることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 石橋敬太郎	4. 巻 21
2. 論文標題 デカーの『欲望の支配、あるいは淫らな王妃』におけるスペインとモロッコとの関係 イングランドを取り巻く国際情勢から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石橋敬太郎	4. 巻 20
2. 論文標題 ピールの『アルカザールの戦い』とイングランドのモロッコ外交政策	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集	6. 最初と最後の頁 17-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石橋敬太郎	4. 巻 22
2. 論文標題 『トルコ皇帝セリムの悲劇』におけるトルコ人表象 東地中海をめぐる新たな国際情勢を前にして	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集	6. 最初と最後の頁 27-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石橋敬太郎	4. 巻 22
2. 論文標題 『ソリマンとパーシダ』におけるロードス島 キッドの反トルコ感情の舞台化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集	6. 最初と最後の頁 33-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石橋敬太郎
2. 発表標題 ロバート・グリーン『トルコ皇帝セリム』におけるトルコ表象 東地中海をめぐる新たな国際情勢を前にして
3. 学会等名 第57回シェイクスピア学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石橋敬太郎
2. 発表標題 トマス・キッド『ソリマンとパーシダの悲劇』におけるロードス島 反トルコ感情の舞台化
3. 学会等名 エリザベス朝研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石橋敬太郎
2. 発表標題 『欲望の支配』におけるスペインとモロッコとの危険な関係
3. 学会等名 第56回シェイクスピア学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石橋敬太郎
2. 発表標題 『背教者』におけるカトリック言説 キリスト教徒のアイデンティティの回復とイスラム世界からの脱却
3. 学会等名 第58回シェイクスピア学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石橋敬太郎
2. 発表標題 『トルコ人となったキリスト教徒』における自由貿易の構図
3. 学会等名 エリザベス朝研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考